第4回「祖父母と高齢 者のための世界祈願 日」教皇メッセージ 2024年7月28日(日 本では2024年9月15 日)

「神はどんな石も捨てません。それどころか、もっとも、『古くなった』石が、『新しい』石の乗る確かな土台とで、霊的な家をともで、霊的な家をしてるのです(一ペトロ2・5参照)」。

第4回「祖父母と高齢者のための世 界祈願日」教皇メッセージ^[1]

「老いの日にもわたしを捨て去らないでください」(詩編71・9参 照))

親愛なる兄弟姉妹の皆さん

神は決してご自分の子らを見捨てません。齢(よわい)を重ね力が衰えようとも、髪が白くなって社会での役割が少なくなろうとも、活動の生産性が下がって無駄として見られかねないとしても、そうなのでず(は外見には目をお向けにならず(サムエル上16・7参照)、多くの人には大したことはないと映る人を選ぶ

ことに躊躇しません。神はどんな石も捨てません。それどころか、もっとも「古くなった」石が、「新しい」石の乗る確かな土台となることで、霊的な家をともに建てるのです(一ペトロ2・5参照)。

聖書は全体として、主の忠実な愛の 物語です。この愛から、慰めの確信 が生まれるのです。神は、人生のい かなるときも、わたしたちがどのよ うな状況にあろうとも、たとえ裏 切っていたとしても、いつでも、ご 自分のあわれみを示し続けておられ ます。詩編は、取るに足らないわた したちを顧みてくださる神を前にし た、人間の心にわく驚きに満ちてい ます(詩編144・3-4参照)。神が わたしたち一人ひとりを母の胎内に 組み立ててくださったこと(詩編 139・13参照)、そして、陰府(よ み) にわたしたちのいのちを渡すこ とはないこと (詩編16・10参照) を、詩編は保証しています。ですか らわたしたちは、老年期にも神は寄り添ってくれる、ますますそばにおられると確信できます。聖書では、 老いは祝福のしるしだからです。

けれども詩編には、主への心からの 願いも記されています。「老いの日 にもわたしを見放さないでくださ い」(詩編71・9参照)。切実で、 直截な表現です。十字架上で叫ばれ た、イエスの極限の苦しみが思い浮 かびます。「わが神、わが神、なぜ わたしをお見捨てになったのです か」(マタイ27・46)。

つまり聖書の中には、人生のどの年 代においても神が近くにいてそだまいう確信と、そしてまた老年的 や苦しいときに強まる見捨てられだ ことへの恐怖との、両方が見いだせ るのです。ここに矛盾はありませ ん。周囲を見渡せば、これらのしてし ばが現実をありありと映し出したい ることがすぐに分かります。わたし たち高齢者、また祖父や祖母の生活には、いやでも孤独がついて回ります。わたしがブエノスアイレスの司教であったとき、老人ホームを訪問する機会がしばしばあり、ホームの人たちにはほとんど面会が来ないことを知りました。何か月も家族と会っていない人もいました。

この孤独にはさまざまな理由があり ます。多くの国で、とくに貧しい 国々では、子どもたちが移住せざる をえなくなるため、高齢者が独り ぼっちになってしまうのです。ほか に、たくさんの紛争状況も思い浮か びます。どれほど多くの高齢者が取 り残されているでしょうか。男たち は、若者も大人も戦場に駆り出さ れ、女たちは、なかでも小さな子ど もを抱えた母たちは、子の身の安全 のために国を離れるからです。戦争 で荒廃した町や村には、多くの高齢 者が取り残されています。捨て置か れ、死が支配しているような地域で

は、彼らは唯一の生存者です。また 世界の別の場所では、その土地の何 らかの文化に深く根をもつ誤った俗 信があり、高齢者に対する敵意を生 んでいます。高齢者は魔術を使って 若者の活力を奪っているとされ、若 者が早死や病気、その他の不幸に見 舞われると、その原因は高齢のだれ かのせいにされています。このよう な考え方は根絶しなければなりませ ん。こうした根拠のない迷信のたぐ い――キリスト教の信仰は、そうし たものから解放してくれます―― は、依然として若者と高齢者の世代 間対立をあおり続けているのです。

しかし考えてみれば、高齢者が「若者から未来を奪う」というこの非難は、最近ではどこでも見られます。先進的で近代化した社会にさえ、それは別のかたちで現れています。たとえば、高齢者が必要とする社会サービスの費用を若者に背負わせることで、国の発展のための資

金、ひいては若者のための資金を吸 い取っている、という考え方が広 まっています。この現状認識は歪ん でいます。高齢者の生存が若者の生 存を危うくしているとでもいわんば かりです。若者を支援するには、高 齢者をないがしろにする、あるいは 抹殺することが必要だといわんばか りです。世代間対立は錯誤であり、 敵対文化に毒されていることの産物 です。老人と若者を対立させること は、容認できない一種の操作です。 「世代間の一体性が危険にさらされ ています。つまり、人間のいのちを その全体の中で理解し、大事にする ための真の評価基準が揺らいでいる のです」(教皇フランシスコ「老齢 期についての連続講話1 時の恵み と世代間交流(2022年2月23 日) I)。

先に引用した詩編――老いても捨て 去らないでくださいと願う箇所―― は、高齢者の生活を巡る陰謀を取り 上げています。大げさに思えるかも しれませんが、高齢者の孤独や切り 捨ては偶然でもやむをえないもので もなく、むしろ、「あらゆる環境、 状態、各人が遭遇するいかなる状況 をも超えて所持| (教理省宣言『無 限の尊厳』1 [Dignitas infinita]) する一人ひとりの無限の尊厳を認め ない、政治的、経済的、社会的、個 人的選択の結果だと考えればお分か りでしょう。ひとたび個々人の価値 が見失われると、人間はただのコス トと化し、場合によっては割に合わ ないとみなされてしまうのです。さ らに悪いことに、高齢者自身がこう した考え方に支配されてしまうこと もしばしばで、自分たちは重荷なの だと考えてしまい、率先して身を引 くべきだと感じるようになるので す、

他方、今日は、多くの人が、できる だけ自足した、他人と接点のない生 活において自己実現を図ろうとして います。仲間意識が危機に瀕し、個 人主義がもてはやされています。

「わたしたち」から「わたし」への 流れは、現代を顕著に表すものの一 つです。家庭は、自分の力だけで自 分を救うことができるという考え方 に対する、第一の、そしてもっとも 基本的な反証であり、こうした個人 主義的な文化の犠牲となっているも のの一つです。けれども歳を取り、 次第に力が衰えていけば、だれも必 要ではない、人とのつながりなしに 生きていける、という個人主義の幻 想は、その実態を露呈することとな るのです。まさに、自分には何もか もが必要になっていると気づいて も、もはや独りとなっていて、助け もなく、頼れる人もいないのです。 多くの人が、手遅れになってようや く気づく厳しい事実です。

孤独や切り捨ては、今日の社会情勢 においては頻繁に見られる事象と なっています。その原因は複数あり

多くの高齢者に、ルツ記に記されて なようなあきらかの気持ちした 取れます。夫と息子の嫁すしたと 齢のナオミが、二人の嫁にいます。 かの生まれな郷に、られますが、 の生まが、まれまがいますがの生まが、まれまが、 であるが、まれまがであるがである。 はいツ1・8参照といますがは、 ますの多るのをとは想像であるいますがは、 をいないないないないないないないないない。 がは価値のない存在だという自覚がある。 ものない存在だという自覚がある。 ものない存在だという自覚がある。 ものない存在だという自覚がある。 ものない存在だという自覚がある。 り、自分と違って前途ある二人の若い女性にとって、自分は重荷なのだと考えています。だから彼女は身を引くほうがいいと考え、若い嫁たちが自分のもとを去り、別の地で未来を築くよう勧めます(ルツ1・11-13参照)。彼女のことばは、当時の厳格で、行く末を決定づける、

社会的・宗教的慣習を反映していま

す、

うことを恐れません。年老いた女性 が自分を必要としていることを感じ 取り、勇気をもって彼女のそばにと どまります。そうして二人の新たな 旅路が始まるのです。孤独は避けら れない定めだという考えに慣らされ ているわたしたち皆に対し、ルツは 教えます。「わたしを見捨てない で という願いに、「わたしはあな たを見捨てません」と答えることは 可能だと。ルツは、どうにもならな いと思える現実を臆することなく覆 します。孤独に生きることだけが、 唯一の選択肢ではないのです。年老 いたナオミのそばに残ったルツが、 メシアの祖先であるのは偶然ではあ りません(マタイ1・5参照)。メシ アであるイエスこそが、インマヌエ ル、「わたしたちとともにいる神」 であり、あらゆる境遇、あらゆる年 齢の、すべての人に、神の近しさと 寄り添いをもたらすかたなのです。

ルツの自由と勇気によって、わたし たちは新しい道へと導かれます。彼 女の道に従いましょう。この若い異 邦人の女性と年老いたナオミととも に旅をしましょう。今の習慣を変え ることを恐れず、わたしたち高齢者 のために、違う未来を想像しましょ う。たくさんの犠牲を払いながら、 ルツの模範を実践して高齢者の世話 をする人、また一緒に生活する人の いない親戚や知人に日常的にそっと 寄り添いを示している人、皆さんに 感謝の意を表したいと思います。ナ オミのそばにいることを選んだルツ は、幸せな結婚をし、子をもうけ、 新たな家を得る恵みを受けました。 これはいつも、だれにでも当てはま ることです。高齢者に寄り添うこ と、彼らの、家庭、社会、教会での かけがえのない役割を認めること で、わたしたち自身も多くのたまも の、多くの恵み、多くの祝福を受け るのです。

この第4回祖父母と高齢者のための 世界祈願日には、祖父母や高齢の 族に、優しい愛を示しましょう。 信を失い、別の未来が可能だとい、 希望をもてずにいるしまっ。 かれたしまることなる でに抗し、「わたしはあなたを見て ません」と臆することなくい。 別の顔を示しましょう。 がの顔を示しましょう。 がの顔を示しましょう。

親愛なるすべての祖父母と高齢者の皆さん、そして皆さんに寄り添うかたがたに、祈りとともに祝福を送ります。皆さんもどうか、わたしのために祈ることも忘れないでください。

ローマ、サン・ジョヴァンニ・イ ン・ラテラノ大聖堂にて

2024年4月25日

フランシスコ

[1] カトリック中央協議会訳 (https://www.cbcj.catholic.jp/ 2024/07/24/30399/)

第4回「祖父母と高齢者のための世 界祈願日(2024年7月28日)」の祈 り

(日本では2024年9月15日)

主なる神、誠実なかた、あなたは、 わたしたちをご自分の似姿としてお 造りになりました。わたしたちを して独りにすることなく、人生の かなる時も、ともにいてくださいま す。わたしたちを見捨てず、見分自と てください。 を見いだし、あなたの子であると い起こさせてください。 みことばによってわたしたちの心を 新たにし、だれひとり見捨てられる ことがないようにしてください。愛 の霊が、あなたの優しさでわたした ちを満たしてくださいますように。 旅の途中に出会う人に、「あなたを 見捨てません」と言えるよう教えて ください。

愛する御子の助けによって、わたしたちが友愛の心を失わず、孤独の悲しみに屈することがありませんように。新たな希望をもって未来に目を向けることができるよう助けてくのさい。「祖父母と高齢者のたの日」を、孤独のない一日と、孤独のない一日としてださい。

アーメン。

(2024年7月19日 日本カトリック司 教協議会常任司教委員会認可) pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/kyoukou-koureisha-messeji2024/(2025/10/30)